

## 「森は生きている」 1

### 日本の森



私たちが今いるのは、長野県蓼科<sup>なつしな</sup>高原の中にある夏の別荘、1500mの森の中です。私は留学生たちに日本語や日本文化を指導している大学教授、ターニャは来日半年のロシアからの留学生です。

「先生、涼しい！東京から来ると別の国に来たみたい」とターニャ。連日30度を超える都会のコンクリートジャングルから、私たちは僅か3時間弱でどこまでも森が広がり小川のせせらぎ、小鳥たちのさえずりが聞こえる別荘地に着いたのです。

日本の国土の67%は森が占めている、数字では知っていても、「森に行ったことがない」という日本人の声をよく聞きます。まして留学生たちは、ほとんど都会・小都会で生活し、日本を理解したつもりになって帰国してしまいます。

実は日本の森は南はマングローブの森が続く沖縄西表島、北はエゾマツの林が続く北海道、そして温暖な日本の大部分に広がる広葉樹、ブナ、ナラ、クリなど様々な姿の森が日本の環境を守り、日本人そのものを支えてきたといっても過言ではないのです。

しかし、日本は明治時代以来、近代化、都市化、合理化の道をたどることで「豊かな社会が築ける」と信じてきました。その結果、物質的には豊かになり、国内・海外どこへでも飛行機や自動車、鉄道で簡単

に行けるようになりました。

しかし、残念なことに「森に行く手段」は遠のきました。なぜなら天然林の多くは過疎の村の近くにあることが多く、飛行場はおろか鉄道の駅も高速道路も森の近くにはないからです。

私が蓼科の森に来るには新宿から特急電車で2時間、茅野駅に着いてからはリゾートの森に行く一日3本しかないバスで茅野の街を抜け、田園の広がる里山を抜けて、ぐんぐんと登り、やっとたどり着くのです。

この別荘地は「自然との共生」を念頭に開発されたもので、「森の生き物たちの中に人間が暮らさせてもらう」のです。ですから木は最小限だけ「切らせてもらう」、道路は最小限、車がすれ違える幅だけ「木を切って、道をつくらせてもらう」、鹿やうさぎ、いのししが道路を横切る時は「森の間借り人」である人間は待つのが原則です。

こうして660万㎡、東京ドーム140個分もの豊かな森は、「人間が使わせてもらっている」ことで、手入れされ、天然林の形を保っています。

今大切なこと、それは「天然林」を守り、手入れをし、生態系を守ることです。一度伐採して二次林を植えても、そこでは生態系は崩れ、鳥や動物も当分の間増えません。「天然林」を維持できなくなっている過疎の村にもっと助成をしていかないと、日本の森は消滅の一途をたどり、生態系も崩れ、コンクリートやアスファルトに覆われた島国になってしまうかもしれないのです。

注1) 国土の67%が森林といっても、その40%は人工林の針葉樹林であり、それらは木造建築や木造の内装を多くすることで、放置された人工林にも手入れされることになる。

注2) 「自然保護」: プリザベーション (放置)、プロテクション (防衛)、コンサベーション (保全)、リストラクション (復元)、リハビリテーション (再生)。地域によって目的をもって、森の維持を行うべきで、そのためには人出もいるし予算を必要とする。国家的なプロジェクトが必要である。

(1320 字)

(2020.12 Written by Mizue SASAKI)

<参考資料>

・『森の旅 森の人』世界文化社



この作品はクリエイティブ・コモンズ 表示・非営利・継承 4.0 国際 ライセンスの下に提供されています。この作品を利用する場合

は、「たどくのひろば」を出典として示してください。

例) 出典 : 「たどくのひろば」 (<http://tadoku.info>)

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License. When you use this work, please indicate the source as in the example above.